同人作品

今の僕です　　秋山義仁

乗りこんだローカル電車に鳩が二羽好きにとんでけ窓を全開
駅無人トイレはありて田が青いクローバ咲きほこる畦歩く
駅前に軽二台来る夫々に乳母日傘の娘(こ)を拾い去る
雷雨明け空はギラギラ死んだ人通りすぎて行く通学道路
学校の回りを走る霊柩車あなた誰なの思い出は何
通学路狸と雉子と白鼻心人口減って今では普通
海からは十キロこの辺りは昔の海辺縄文の堀立小屋や貝塚ありました
崖の下人知れずありの祠見る無意味の意味を考え歩く

祠は祠廃社は廃社かきわけて行けども果てぬ里の笹原

スーツ着た紺の兵隊が昔の僕すれ違う禿老人が今の僕

プールには今年も行けず旅にも出れずコロナ禍以来家ばかりです

けつまづき人の目集まる何事もなきかの如く颯爽と立つ

マンションと線路の間の公園のブランコ揺らし夕陽飲みこむ

こともなく日がすぎおれば麦藁(ワラ)短パンスニーカ終の夏かも

近い日はマックか茶店ワンパターンだから時間が速いとても

夾竹桃終ればすぐに百日紅空は紺碧子供は休み

街のおはぎ屋閉門蟄居御礼とお詫びの達筆がとても悲しい

檞(ブナ)の木はどれも裸木(ハダカ)雪積り洞(ウロ)には熊が鹿は皮はぎ

裸木の枝の隙間に日本海小樽行く船白くて高い

降り続く雪の番して眠る男冷えきって我温めんと重ねる体

墓参の道に咲く　　石邉綾子

ふるさとの道を灯して彼岸花めぐり逢う日の約束のまま
枯れ果てた泉に落とす一滴の君の泪かぶどうのしずく
もう一度時空を越えて哀しみの海岸通りの父母の家
中秋のセンチメンタルジャーニーと言ってしまえばそれだけのこと
昨日から今日への針を滑らせてイマジンを聴く九・一一
いつまでも変らぬようにと不安げに写真の君は我を見ている

喜び　　井上省吾

窓越しに未だ明けきらぬ夜明け前暗い夜空に眉月の顔
美しく輝く月は我が心写し出してる清らかな内
月に居たうさぎは何処に消えたのか遠い昔のお伽の世界

月に行く時代が近く訪れる科学の進歩おそるべきかな
未だ明けぬ闇に浮ぶは細い月笑ったようなやさしい顔に
窓を開けひんやりとした新鮮な空気と風を部屋に引込む
目を覚まし外の明るさ確認し雨戸を開けて硝子戸開けて
床離れ一歩一歩を踏みしめて階段おりる夜明け前

今日のメニュー

塩サバをフライパンにて焼いているうまく出来るかご飯のおかず
メンタイコ今朝はおにぎり海苔巻いて糠づけ出していただきますか
朝ごはん野菜炒めに目玉焼きトーフ納豆今日も元気
三合の米を炊きあげ冷凍し保存している我が冷凍庫
朝昼はちょっと多目に口に入れ夜は少なめ後は寝るだけ
期限切れ冷凍させた食パンチーズをのせてトースターで焼く

皿うどん野菜炒めてトロミつけ乾めんにかけ夕食にする
無水鍋具材を入れてダシ入れて後はコトコト煮物をつくる
炊飯器使うことなく土鍋にて米を炊くこと数十年
何を食べ何を作るか考える朝のひととき思いめぐらす

別離　　**加山妙子**

不意打ちの君のメールは三行半十とせの絆をご破算にして
一瞬のまばたきなのか十年は古稀にして知る人の世の憂き
わが恋は打ち上げ花火の数秒の燦めく光の饗宴に似て
閉ざされし門の彼方は薄闇の人影もなき地獄への道
遠ざかる君の姿は山道の道標あとに行方もしれず
人の夫と承知のうへの年月を返して寄越せと云ふも詮なし

ぜひなしとおもへど口惜し捧げしは十とせに及ぶ年月なりしが
忘れないギター抱きてかき鳴らす男盛りの君の姿を
忘れないギター抱きてかき鳴らすべサメムーチョの激しき調べ
恋てふは可笑しく哀しうたふのは真夏の午後のビリーホリディ
恋てふは可笑しく哀しきものなりと真夏の午後のビリーホリディ
満月に君の名前の形代を燐寸擦り燃す縁切り儀式
頭(かしら)よりじりじり音たて燃えてゆく愛しきひとよ永遠にさよなら
かしらよりじりじり焦げて燃えてゆくさよなら永遠(とわ)に愛しきひとよ

草刈り　　熊谷恒樹

小気味良く剪定鋏の音がする涼しい朝の間ちかくの誰かが
朝夕の涼しい風とうらはらに真昼青空三十二度に

猛烈な熱さの中に草を刈る冷えたビールを頭においてい
刈り終えた清々しさを味わいつ十日もたてば元のもくあみ
不精髭マスクにかくし六ヶ月どこかあった変身願望

最後の一首　　**甲村秀雄**

これが最後の一首と思ひつつまだつひの一首とは言へぬできばえ
木枯しやいつしか冬となりぬれば歌をよまむとすれど歌にならず

大悲無倦常照我　　**甲村雅俊**

いつ死ぬか知りたるのちの幾年を生きて歌人は嘘してゐた
あたふたと降りる準備か人生の終着駅に近づくふたり
お釈迦さまは君の憂ひを捨断せよ悲泣するのをやめよと言つた

垂乳根の母の体を洗ひたり仏像をわが手にするごとく

独立者は智者の振る舞ひなどせずにただ一向に念仏をせよ

たとひ身は苦毒のうちに終るとも精進すれば後悔はなし

仏様たすけましませ惑染の凡夫のわれを南無阿弥陀仏

仏様の大悲もの倦じさるるなく常に私を照らしくださる

信心は無明長夜の燈炬なりこころの眼に光はうつる

車椅子からから押してゆく先は秋の陽射しに光る呑川

秋しぐれ、君は美し　　長雄誠一郎

秋しぐれ鳥居をくぐる傘二つ後ろを歩く君は美し

夕暮れのいちょう並木は海風に揺れて銀杏落ちて匂うか

要らぬこと口に出しては傷つけて泣きたい思い気づかずにいる

逢えぬうち本当の気持ちはすれ違い道に迷って消える薔薇の香
あてどなく雨の市電を待つ君の視線の先に雷鳴響き
死神が彫りつけた傷見ないふり失ってなお想いはまさる
透きとおる空き壜庭に転がって光は歪み影は黒く刺す
秋晴れのニコライ堂を仰ぎみて露に霞んだ未来の光
気がつくと金木犀の香る朝身支度をして前へ進もう
永遠の愛を誓ってささめごと返事は君の優しい寝息

圧力鍋　　氷室敬子

はるかなる遠い思い出うかびくる曇天の日の雲のように
あの夏に君は泳いだねわがふるさとの川に入って
足よわくよろめきながら中庭へいやされている十月の風に

骨つきのトリとゴボウ煮つめいるシュッシュと蒸気吹き出す圧力鍋よ
むかしからわが家のカレーは中辛で君はジャブジャブソースをかける
スズカケの樹肌はがされ落ちついてきのうよりもきれいになった
わが好むハヤシライスたっぷりとタマネギいため煮こみている

秋桜　　本田洋子

蝉の声　鈴虫の声　リスの音　鳥飛ぶ羽音　朝五時の音
八月の乾いた道に一群れの夏水仙の真白く咲けり
校庭の野球部の声研して白球を追ふ若き汗光る
いつの間に金木犀の大きな木仄かに香る耳の冷たさ
淋しさも独り暮らしも慣れてきぬ断わろうかな同居の話
足痛め二本足から三本へ元気な娘に杖を贈られ

白ピンク濃い紫の秋桜どこまで続く幼な児は埋もれ
十五夜の見えし便りが逗子の友宮崎の孫からも届きぬ
十五夜や銀のすすきのその風情物言わずとも秋生ける人
ビューゴーと窓を唸らす台風の過ぎ去るを待つコスモスの鉢
二度咲きの金木犀を見上ぐれば香りのシャワーうろこ雲薄く

古希を迎える　　丸山光

区別だと言われてみても差別だと言い返せない弱き人々
金色の銀杏がわれに降りかかる亡き友のこと偲びし時に
おぼろげな少年の日の大望も人ごととなり古希を迎える
自分だけ知ってる自分の過去なげきトラウマひとつ抱えて老いる
あの人と友の名前が出てこないそれでも互いに話は進む

歌詞などは全く知らない春日部の市歌が流れる夏の五時半
少年Ａのごとくそのままに歳重ね記念写真の中央に座す
思い出もゆめ・まぼろしの如くなりみんな忘れて此岸に立てり
見ただけで老人なんだと分かるのに歳を聞かれて割引うける
嘆かずに日常会話のごとくして互いのガンの蘊蓄かたる
息子からまたガンだってとメールくるただそれだけのメールの返事

梨の実　　守乃みさと

風に稲揺れる景色を見に行こう今日が最も美しいはず
ひと言の断りもなく秋は来て二人の間をつうっととんぼ
梨の実をするするすると君剥けば滴る秋の優しい甘さ
頑なな君の心が解けてきた寂しい時に寂しいと言う

朗らかにお前が好きだと言った師は九月八日の朝露となり

夏の終わりから秋に変わる頃　　若杉ゆき

夏終わり台風のあとこの世には未練無しと旅立った父
ホスピスに入ってからは水も断ち腕時計見て死ぬ時決めた
このコロナ五年は続く父は言いホスピス入り五日目で逝く
実家にはいつも座れり書斎にパソコン向かう父居るみたい
おかえりと声かける人居ない家ひとり帰れば淋しさ募る
孫の莉子運動会を見たいけどコロナのせいで人数制限
かけっこで転んですぐに立ち上がり一等になる莉子ちゃんステキ
夏終わり秋に季節が変わる頃一番好きで一番嫌い
真夜中にチューハイ片手キャンバスにむらさき煙る蒼い薔薇の街